

10. ポリオ後遺症に横紋筋融解症を合併した一症例

門司労災病院リハ診療科

水江 優子・佐伯 寛・稗田 寛
産業医大リハ医学 緒方 甫・蜂須賀研二

横紋筋融解症は、通常、障害された筋が完全に再生され、機能障害を残さないと報告されている。今回、ポリオ後遺症 (post-polio syndrome) に横紋筋融解症を合併し、左下肢麻痺の回復が不良であった症例を経験したので、報告する。

症例は48歳男性。1歳頃、ポリオに罹患し両下肢麻痺を生じたが、歩行は両松葉杖を使用し屋外実用歩行、ADLも自立していた。1996年2月初旬より四肢脱力が出現し、徐々に進行。2月21日歩行不能となったため当院受診。筋原性酵素の上昇と低K血症を認め、横紋筋融解症と診断された。リハビリ訓練併用により、両上肢筋力はほぼ完全回復したが、左下肢は回復不良で入院前の歩行レベルには至らなかった。

横紋筋融解症は種々の原因で発症するが、本症例はHypokalemic myopathy in chronic alcoholismを生じたものと考えられた。左下肢麻痺の回復が不良であったのは、post-polio syndromeの影響が大きいと考えられた。

11. 「Postpolio syndrome」の臨床と医療・保健・福祉—ある難治、進行性神経・筋疾患の1例から学んだりハー

健友会上戸町病院整形外科 曹 政和

健友会上戸町病院リハ科 平野 友久

長崎大第一内科 中村 龍文

【はじめに】 ポリオ罹患後10年を経た患者に筋萎縮をきたすことがあり、これはpostpolio syndromeと呼ばれている。本症を通して、医療、保健、福祉を考えてみた。

【症例】 64歳、女性。【主訴】 両下肢痛・脱力、歩行障害。【現病歴】 3歳時発熱。その後より5歳まで歩けず。40歳代後半頃から四肢の脱力感出現、徐々に歩行困難となる。63歳時には病状進行し身障2級程度。【リハ評価】 バーセル・インデックス55点 自立度III。

【考察】 この症例は、AlterとDalakasの診断基準

から「PPS」と考えられた。歩行訓練や下肢筋力強化訓練など施行しているが治療効果が薄く心からの充実感がない。夫の疾患不理解に心を痛めており精神的にも療養指導が必要。「事後重症の障害」の項で障害年金手続き中。

【おわりに】 ポリオ罹患患者で症状の増強を訴える者の中で1960年代から30～40年後にあたる現在、本症が発生する可能性が高いといわれているので、さらに日常診療上注意すべきである。

12. 磁気刺激によりすくみ足が改善した脳血管性パーキンソン症候群の1例

鹿児島大リハ科

豊島 学・上土 橋浩・衛藤 誠二

日吉 俊紀・川平 和美・田中 信行

著しいすくみ足を呈した脳血管性パーキンソン症候群の1例で両下肢の磁気刺激を行い、すくみ足が著明に改善したので報告する。

症例：68歳、男性。

現病歴：1994年1月頃より四肢の脱力感、3月よりすくみ足が出現し、多発性脳梗塞と診断された。11月頃よりすくみ足が強くなり歩行不能となった。

入院時所見：動作は緩慢で著しいすくみ足がある。四肢の深部反射は亢進し、尿失禁を認めた。磁気刺激は円形コイルを大腿二頭筋に接触させ、左右交互に10回磁気刺激を行った。磁気刺激直後、すくみ足は著明に改善した。その改善は同様の触覚と音を与え、磁気刺激を全く与えないプラセボ刺激より有意に大きかった。

考察：両側大腿二頭筋の磁気刺激によるすくみ足改善のメカニズムは不明であるが、脊髄レベルで拮抗筋の緊張低下、上行した刺激が脳幹、大脳皮質へ影響したことが考えられる。

13. 磁気刺激の疼痛閾値への影響

水俣市立湯之見病院

田島 徹・木原 薫・紫藤 泰二

安田 國士・堤 隆治・紫垣 光久

幸本かおり・黒木 洋美・浅山 滉

腰痛や肩痛など疼痛を訴える患者において磁気刺激後、症状が緩和することをしばしば経験される。今